

## 「ちょっと足りない」は大チャンス

時は昭和の末、私が二十代の頃、先輩の先生が「小学校は、いろんな体験に出会わせる場所。ちょっと足りない体験があれば、あとは核融合のように自分でエネルギーを出してどこまでも伸びてゆく。」と熱く語っておられたのを思い出します。教員生活が進むにつれて、「なるほど」と思う事例にたくさん出会いました。

小学校の陸上記録会で走り高跳びに出場し、同記録なのにたった一回の試技の差で入賞を逃したA君。体格に恵まれた子供ではありませんでしたが、その後も中学・高校と陸上競技を続け、インターハイに出場するまでに成長しました。

そういえば、かつて富山県の隠れたお家芸であった小学校の管楽器コンクールでも、県代表を射止めた年の子供たちの中には、まるで満足したかのように中学校までで活動をやめていく子がいました。一方、「ダメ金」で惜しくも選に漏れた年の子供たちの中に、高校・大学や実業団へと、どんどん音楽好きになってステップアップしていく子供がずいぶん多かったように思います。それも本当に音楽や仲間との交流を楽しんで。

思えば二〇一四年、メジャーリーグへと雄飛していった田中将大選手も、甲子園の決勝で自分が最後の打者で三振し、『準優勝』で高校生活を終えた「ちょっと足りない」組でした。

多感な少年期に、すてきだったけど、ちょっと足りないを味わうと、若い心に決して消えない情熱の炎がともるらしいのです。

「すごく惜しかったね。」と言われている子供に出会うたび、私は必ず「背後にはもう『幸運の神様』が微笑んでいるのが見えるよ。」と話すことにしています。